

恭仁宮出土軒丸瓦KM03C  
(6285B)の供給に関する考察

溝口泰久

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



# 恭仁宮出土軒丸瓦KM03C (6285B)の供給に関する考察

溝口泰久

## 1. はじめに

聖武天皇は天平12(740)年の東国行幸の末、恭仁京へ遷都した。恭仁京の実態は未だ定かではないが、その中心である恭仁宮については、京都府教育委員会による50年以上に及ぶ発掘調査により中枢の様相が明らかとなりつつある。調査の進展とともに多様な瓦が出土しており、それらは平城京などからの搬入や恭仁宮造営に際した生産など、瓦が恭仁宮に至るまでの来歴も多岐にわたると推測される。『続日本紀』において平城宮からの大極殿移築記事により、平城京同範軒瓦が搬入される一つの契機を伺い知れるが、それだけでは説明するのが困難な軒瓦も存在する。すなわち、平城宮でほとんど出土しないにもかかわらず、恭仁宮では一定の数量が出土する軒瓦である。このような軒瓦のなかから、平城京型式では6285B、恭仁宮ではKM03Cと呼称される軒丸瓦について検討する。これにより、恭仁宮跡出土軒瓦の供給背景の一つを考察したい。

なお、軒瓦の型式名について、平城京周辺の資料を取り扱う際は基本的に『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』（奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編1993）に準じて「数字4桁+アルファベット」で表記し、平城京と同範の恭仁宮跡出土軒瓦を取り扱う際は『恭仁宮跡発掘調査報告書Ⅲ』（京都府教育委員会2025）に順じて「KM or KH+数字2桁+アルファベット」の表記を用いることとする。

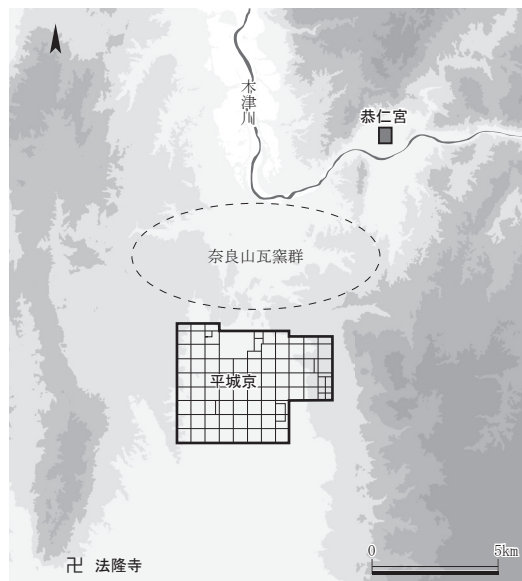


図1 本稿で取り上げる遺跡(S=1/300,000)

## 2. 6285 Bの位置づけに関する先行研究

6285 Bは、奈良時代に創建された法隆寺東院に目立って出土する軒丸瓦で、同じような出土傾向の6691 Aとともに創建時所用軒瓦として考えられた<sup>(注1)</sup>。1973年から、恭仁宮跡の調査が開始されると、恭仁宮とその後の山城国分寺に使用された多様な軒瓦が明らかとなり、上原真人はこれらの軒瓦を4群に分類した<sup>(注2)</sup>。このなかで、恭仁宮に使用された軒瓦は第1群「恭仁宮造営時に、平城宮から運び込んだ瓦」、第2群「恭仁宮造営時に新調され

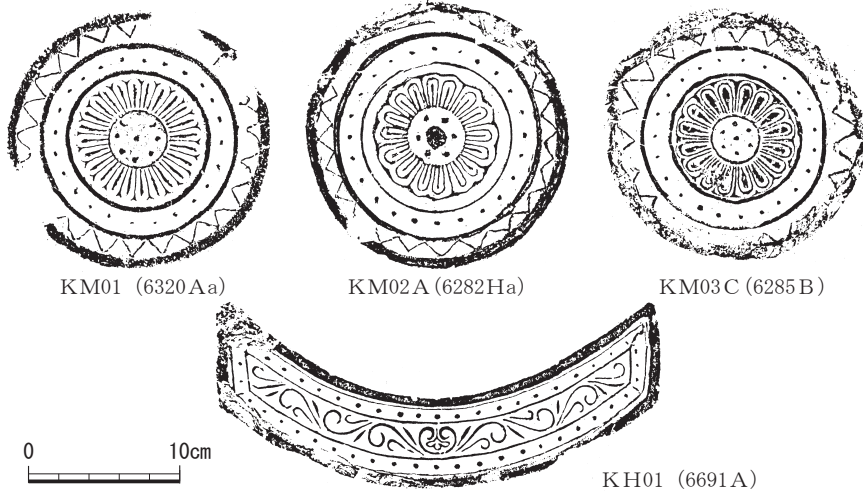


図2 恭仁宮の主な軒丸瓦(京都府教育委員会2025を基に作成)

法華寺下層遺構の組み合わせ

法隆寺東院の組み合わせ

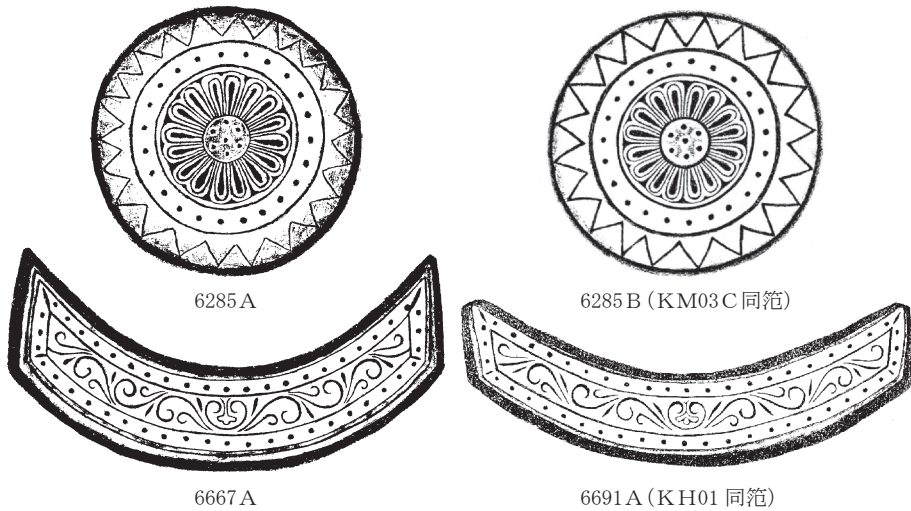


図3 法華寺下層遺構と法隆寺東院の軒瓦  
(奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編1993を基に作成)

た軒瓦」に該当し、6285Bと同範であるKM03Cは第2群軒瓦に位置づけられた。法隆寺東院の6285Bに組み合わせる6691Aと同範のKH01が恭仁宮でも多く出土し、これらの軒瓦は平城京内の6285A-6667Aの文様系譜を直接踏襲していることから、恭仁宮大極殿で主体をなすKM01(6320A)-KH01(6691A)の組み合わせにやや遡り、恭仁宮造営以前にKM03Cが供給された可能性を示した点は注目される(図1・2)。平城宮において、6285Bは出土量が僅少であるが、法隆寺東院で組み合っていた6691Aは宮内で数多く出土する。6691Aの検討に付随して6285Bは評価されることになる。6691Aの範傷は法華寺下層→法隆寺東院→恭仁宮→平城宮の順に進行し、古い段階の法華寺下層と法隆寺東院において6691Aは6285Bとセット関係にあることが明らかとなった<sup>(注3)</sup>。最も古い6691Aが供給されたという法華寺下層遺構は、平城宮に隣接した藤原不比等以来、藤原氏に伝領された邸宅地である。ここは6285B-6691Aの祖型である6285A-6667Aの主たる供給地であったため、6285B-6691Aはその補足瓦生産のために作範されたと考えられている。

これまでの研究では、6285Bはあくまでも6691Aに組み合わせる軒丸瓦としての評価以上のことはなされておらず、6285B自体の資料的性格まで検討が及んでいない。特に、法隆寺東院に次いで出土点数の多い恭仁宮の6285B、すなわちKM03Cは久しく注目されていない。6285B全体のなかでKM03Cを位置づけることで、6285Bの性格が一層明らかとなり、ひいては恭仁宮に供給された背景の解明につながると考える。

### 3. KM03C (恭仁宮 6285 B) の基礎的検討

#### (1) 文様の特徴

6285型式は、蓮子が1+6の複弁8弁軒丸瓦であり、線彫りであるものの高く突出する弁は、平城I期<sup>(注5)</sup>(708~721年)の6304型式の流れを汲む。外縁は外反する傾斜縁で、属性として古い特徴をもつが、6285Bの中房は平坦で省略化された特徴もある。このような特徴と天平11(739)年頃に創建とされる法隆寺東院所用瓦であることから平城II-2期(729~745年)に位置づけられている。この年代は恭仁宮も造営された天平年間に相当する。

#### (2) 恭仁宮における出土状況

6285Bと同範のKM03Cは、恭仁宮において12点出土している。令和3年度の恭仁宮跡第102次調査までに出土した平城京同範軒丸瓦は計110点で、KM03Cはその10.9%を占

表1 平城瓦編年と恭仁宮跡出土軒瓦の年代

平城瓦編年	第I期		第II期		第III期		第IV期		第V期			
	1 和銅 元年	2 聖龜 元年	1 養老 5年	2 天平 元年	1 天平 17年	2 天平 17年	1 天平 17年	2 天平 17年	1 宝字 元年	2 神護 景雲 元年	宝龜 元年	延暦 3年
	708	715	721	729	745	749	749	757	757	767	770	784
	715	721	729	745	749	757	767	770	784			

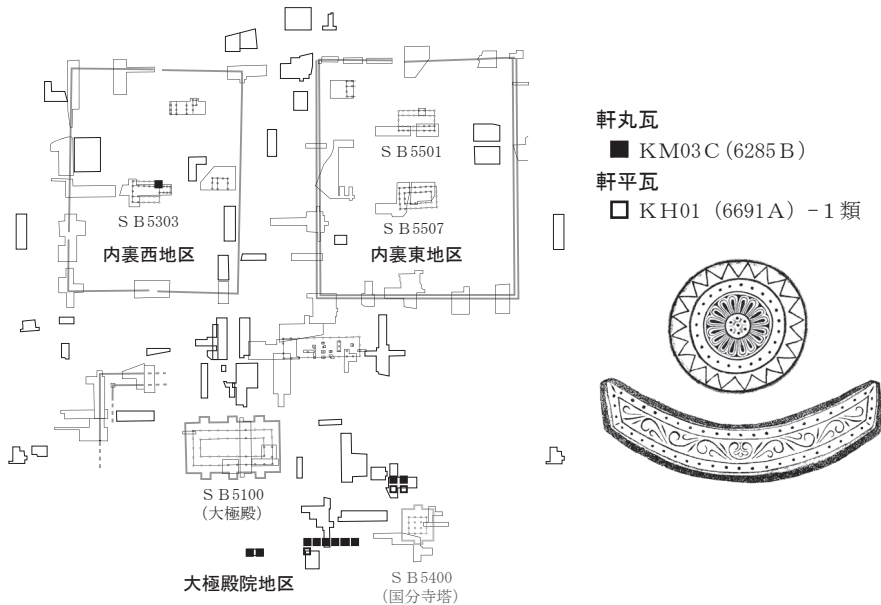


図4 恭仁宮におけるKM03Cの分布

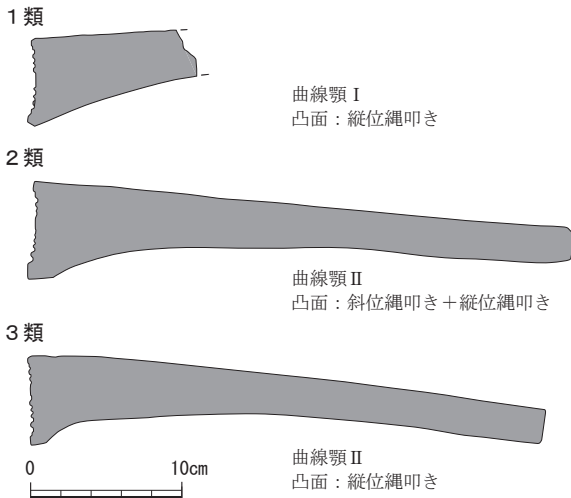


図5 KH01の分類(京都府教育委員会2025を基に分類)

め3番目に多い軒丸瓦である。そのため、比較的数量の多いKM03Cの分析は恭仁宮跡出土軒瓦に供給背景を考えるうえで重要である。

KM03Cの出土傾向を確認しておく。全12点中、8点が国分寺塔周辺において出土し(図4)、分布に明瞭な偏在性を看取できる。恭仁宮以後に造営された国分寺の塔は恭仁宮段階では当然存在しないのであるが、KM03Cの集中する位置で国分寺塔以外に重要な遺構は現状では検出されていない。しかし、後述するように瓦の年代としてKM03Cは国分寺のある天平17(745)年頃には位置づけ難い。

出土傾向からは軒瓦のセット関係も検討できる。国分寺塔周辺で出土した平城京同範軒平瓦は11点、そのうち、KH01は5点を占める。恭仁宮において、KH01は製作技法と分

布傾向から1～3類に分類可能である<sup>(注7)</sup>(図5)。1類の存在はこれまで認識されていなかったが、KH01のなかで1類は最も生産時期が早いと考えられるため、その存在は重要である。1類には全形のわかる資料がなく、範傷の進行状況を詳細に捉えることはできないものの、3類の段階で出現する範傷が認められず、製作技法からみて曲線類Ⅱの2・3類に対して曲線類Ⅰの1類は古相を示す資料である。KH01のうち1類は国分寺塔周辺でしか出土しておらず、同様の出土傾向の6285Bと組み合わせる。これは法隆寺東院と同じセットである。よって、恭仁宮における出土状況と他遺跡におけるセット関係との共通から、KM03C-KH01-1類が成立する可能性は高いといえる。

### (3) KM03Cの製作技法

KM03Cを同範品と比較していくにあたり、まず製作技法を確認しておく。瓦範の形態は、瓦当側面まで範端が及ぶB型範である。瓦範に対して、瓦当面で突出する外縁部と内区部に粘土を詰め、全体を覆うように粘土板を重ねる。接合する丸瓦は、接合部の凸面に縦キザミを入れ接合の強化を図っている。この丸瓦を瓦当円盤に立てて接合するに際し、瓦当裏面にもう一枚の粘土板を重ねて瓦当部を成形しつつ、瓦当裏面と丸瓦凹面の境をナデつけ丸瓦部と瓦当部を密着させる。あわせて、丸瓦凸面側にも補強粘土を貼りつけている。丸瓦接合ののち、接合部の丸瓦凸面から瓦当側面にかけて縦ケズリによって整形するが、範端の被り痕が残るため、この調整は瓦範を外すことなく行われている。つまり、整形の最後まで瓦範の上で行われたと考えられる。

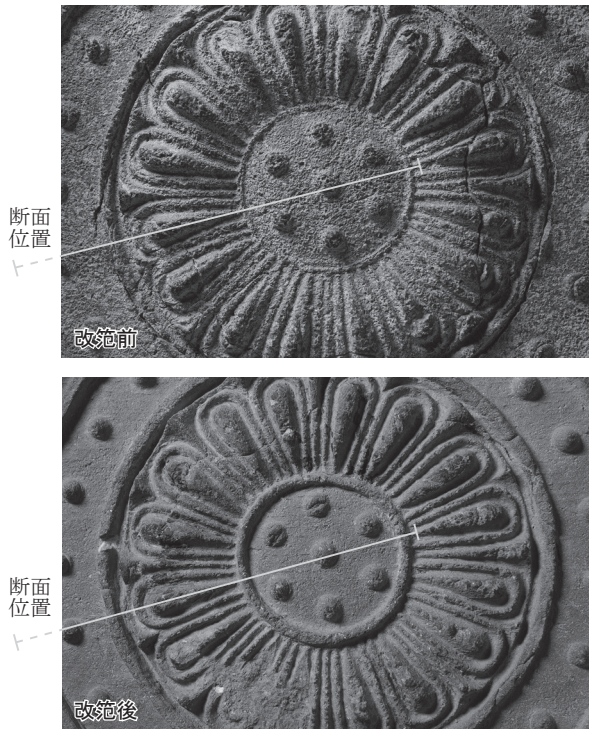
### (4) KM03Cの改範

6285Bの瓦範は、内区が彫り直され蓮弁の形が変化するなど文様に変化があることから、『型式一覧』では改範前後で6285Baと6285Bbが設定されている。恭仁宮で出土する6285B同範のKM03Cは6285Baに相当するが、資料の観察からKM03Cのなかでも改範がなされていることが判明した(図6)。改範による瓦当文様の変化は、以下の点に顕著である。

- ①内区の蓮弁の盛り上がりが大きく、蓮華文の立体感が増している。
- ②中房や内区を画する圏線が太く、高くなっている。
- ③外区の珠文の突出が大きくなっている。

上記の変化とともに範傷の増加も認められる。よって、生産時に瓦範への粘土詰めが甘いことによって瓦当文様の表出が不十分であったために生じた個体差ではない。この改範前後を分別するにあたり、便宜的にKM03Ca(改範前)とKM03Cb(改範後)を設定しておく。KM03C全12点のうち、実見しえた8点の中にはaが2点、bが5点あることを確認した。

瓦当面写真



瓦当断面 (等倍)

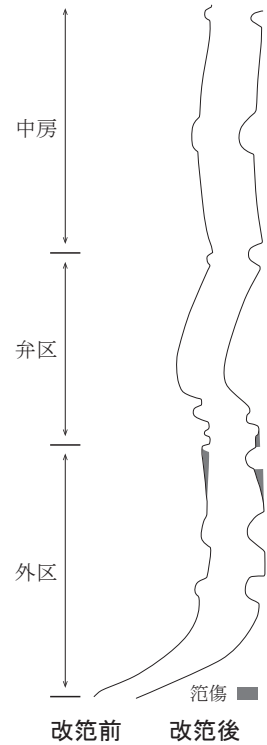


図6 KM03Cの改範前後比較

#### 4. 6285 Bの検討

##### (1) 6285 Bの範傷進行

6285 Bは、平城京内ではあまり多く出土していないが、平城宮内や法華寺周辺にて出土が認められる。平城京外では、法隆寺において特徴的に出土している。これらの6285 Bについて検討したいが、その前提として範傷進行過程を確認しておく。範傷出現位置を観察したところ、範傷の進行は5段階に分けられる(図7・表2)。なお、前章で述べた、恭仁宮6285 Bについて、改範前のKM03Caは1段階に該当し、改範後のKM03Cbは2～3段階に該当する。

##### (2) 6285 Bの出土傾向

平城宮 宮内では約10点程度出土しているようであるが、実見している範囲では分布が特別まとまる様子はない。6285 Baに位置づけられるものについて、製作技法等はKM03Cとの差異は見受けられず、丸瓦凸面にキザミを施したものも確認している。範傷段階は2段階～5段階(6285 Bb)が認められる。

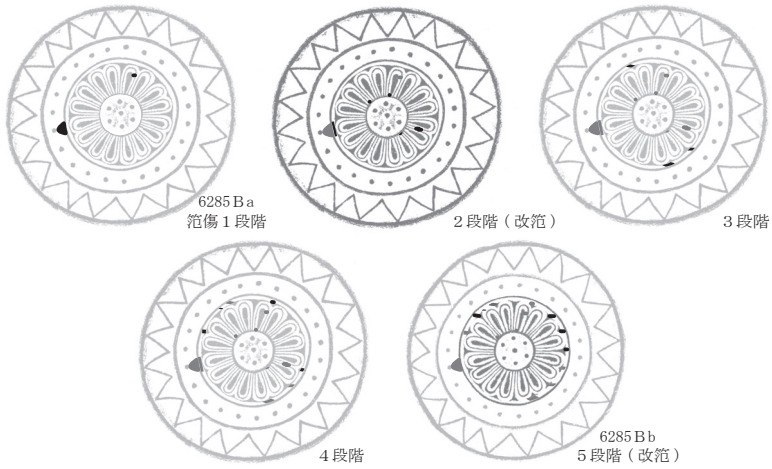


図7 6285Bの範傷進行過程  
(奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編1993を基に作成)



図8 6285B接合部の丸瓦キザミ

表2 6285Bの範傷段階

型式番号	範傷段階	南山背		法隆寺東院	平城京	
		恭仁宮	平川魔寺		平城宮	左京二条二坊周辺
6285 B a	1	○				
	2	○			○	○
	3	○	○		○	○
	4			○	○	○
6285 B b	5		○		○	○

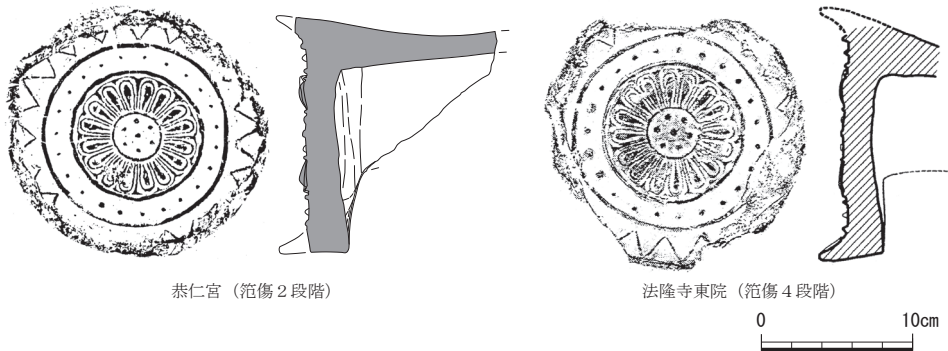


図9 6285Bの諸例  
(京都府教育委員会2025、法隆寺昭和資材帳編集委員会1992を基に作成)

平城京内 平城京では、左京二条にて出土が認められる。とりわけ、左京二条二坊には法華寺が所在し、この下層遺構は旧不比等邸や旧光明子邸に比定されている。6285 Bは法華寺下層遺構の所用瓦である6285 Aの補足瓦として生産が始められたと考えられている。ただ、法華寺旧境内で出土した6285 Bのうち、実見できたものは6285 B bであり、生産時期が遅れるものである。当地で6285 Bと組み合うとされる6691 Aについては、曲線顎 I の古手のものが存在するとされるが、実見できた個体はすべて曲線顎 II であった。6285 B - 6691 A の生産初期の製品が法華寺下層遺構に供給された可能性は残るが、その量が多くなかったことは確実だろう。

また、左京二条二坊十一坪で6285 Bが1点出土している。6285 Bが生産された平城II期、すなわち天平年間において、十一坪ではコの字型配置の建物群が形成され、南に位置する十二坪と合わせて京内官衙や離宮といった性格が指摘される地点である。<sup>(注8)</sup> 6285 Bは範傷2段階のもので、丸瓦部にキザミが認められ、KM03Cとは基本的に共通するつくりである(図8)。左京二条三坊一・八坪においては、6285 Baが3点出土している。法華寺に隣接し、奈良時代前半は坪境小路側溝がなく2町利用が推定される。<sup>(注9)</sup> 実見できた6285 Bは範傷3・4段階であった。左京二条五坊北郊では6285 Bが1点出土している。南一条大路以北に位置し、条坊遺構が見つかっておらず大規模宅地利用が想定されている。<sup>(注10)</sup> 出土した6285 Bは範傷3段階である。

法隆寺東院 法隆寺において、6285 Bは東院で14点出土しているのに対し、東院外では2点の出土にとどまる。まとまった奈良時代の軒瓦は他になく、6285 B - 6691 A (曲線顎 I) が天平間に創建された東院の創建瓦に位置づけられている。<sup>(注11)</sup> 6285 Bはいずれも範傷4段階である。製作技法について、丸瓦接合部にキザミが認められるものがなかった点、焼成もやや軟質である点で、他遺跡出土資料と比べ異なる。

平城京内で出土している6285 Baは基本的に恭仁宮KM03Cと製作技法や焼成に顕著な差異がなく、同一集団により生産されたものだろうが、1段階は認められていない。一方、法隆寺東院6285 Bは、先述したように製作技法等にやや異なる特徴がみられる。東院6285 Bに組み合う6691 Aには、凸面縄叩きのものに加え他遺跡にはない凸面格子叩きのものがあることも含め、恭仁宮+平城京出土資料と法隆寺東院出土資料では6285 Bの生産の様相が異なっていたと考えられる。ただし、この差異が異なる工人によるのか、同一の工人集団における内的変化に起因するのかは、現状断定できない。

## 5. 恭仁宮においてKM03Cが出土する意義

### (1) 年代の付与

KM03Cの生産年代につき、筆者は730年代でも半ば頃におさまると考えた。<sup>(注12)</sup>法隆寺東院の創建年代が文献資料から730年代後半に位置づけられ、創建時に使用された東院出土6285Bに創建年代を付与できる。したがって、東院の6285B 範傷4段階を遡って生産されたKM03C（範傷1～3段階）の生産年代は730年代半ば頃とみなのである。

KM03Cが恭仁宮に供給されるタイミングは、①恭仁宮造営以前（～740年）、②恭仁宮造営時（740年前後）、③山城国分寺造営時（745年～）の3パターンが想定される。①はKM03C生産直後に供給された場合、②③は生産年代との懸隔があり、一定期間ストックされた、あるいは一度建物に使用された後に供給された場合である。

これらを検討するうえで、KM03Cに6285B 範傷1段階が含まれる点は重要である。前章で確認したように、範傷1段階の資料は管見の限り恭仁宮にしか存在しない。加えて、明らかに生産の段階が異なる法隆寺東院を除き、恭仁宮ほど6285Bが出土している遺跡はない。このように考えると、再利用瓦として恭仁宮に6285Bを搬入する搬出元を想定し難いのが現状である。また、造営の多い天平年間において、瓦がストックされることは一般的でないだろう。特に、6285Bは平城宮に出土が少なく、宮系の瓦生産の産物とはいえないため、恭仁宮造営のためにストックされるとは考え難い。同様に、国分寺造営という国単位の造営事業のために、瓦がストックされるとは考え難い。よって、②③の可能性は除外したい。消去法ではあるが、筆者は残る①を仮説としている。

## （2）Aセットの供給と甕原離宮

①を追求するにあたって注目されるのは、恭仁宮一帯の甕原と呼ばれる地域に営まれた甕原離宮の存在である。『続日本紀』において、甕原離宮は和銅6（713）年の元明天皇行幸を初出とし、聖武天皇即位後は神亀4（727）年5月、天平8（736）年3月、同11年3月に計4度の行幸記事が認められる。このような活発な離宮利用のもと、KM03Cとそれに組み合うKH01-1類が甕原の地に供給されたと推測する。KM03Cの生産年代が730年代半ば頃とみられることから、神亀4（727）年と天平8（736）年の甕原離宮行幸の間に瓦の使用を伴う離宮の整備を想定するのが妥当と考える。

甕原離宮の位置は木津川南岸の法花寺野に比定する説など諸説あり確定しないが、<sup>(注13)</sup>いずれにせよKM03C - KH01-1類が集中する国分寺塔跡付近は法花寺野より離れている。国分寺塔跡付近で出土するまでの過程を2つほど提示しておきたい。1つは、当初これらの軒瓦が供給された建物が法花寺野周辺にあり、恭仁宮あるいは国分寺造営に伴って塔跡付近に離宮の瓦が再利用された可能性である。<sup>(注14)</sup>もう1つは、塔跡周辺に甕原離宮関連建物が存在した可能性である。ただし、そのような遺構は未検出のため、あくまでも瓦の存在から想定した仮説である。

## 6. おわりに

本稿では、恭仁宮跡出土軒瓦のうちKM03Cについて、その供給背景を考察した。生産年代は恭仁宮期を遡るものの、平城宮・京からの出土が少なく、再利用による搬入が想定し難いという点から、それ以外の供給背景を論じることが目的意識としてあった。あくまでも仮説であることを自認しており、今後の調査成果に期待する。

(みぞぐち・やすひさ = 京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

謝辞 資料の実見に際して個人・機関から多大な御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。浅井猛宏、今井晃樹、川畑純、菊池珠美、桐井理揮、國下多美樹、田中龍一、原田憲二郎、細川康晴、京都府教育委員会、京都府立山城郷土資料館、城陽市教育委員会、奈良市教育委員会、奈良文化財研究所、龍谷大学考古学研究室（五十音順、敬称略）

- 注1 森郁夫1979「飛鳥・奈良時代の瓦一斑鳩地方を中心として」『日本古寺美術全集』第2巻 法隆寺と斑鳩の古寺 集英社
- 注2 上原真人1984『恭仁宮跡発掘調査報告瓦編』京都府教育委員会
- 注3 毛利光俊彦・花谷浩1991「第IV章考察2屋瓦」『平城宮発掘調査報告XⅢ』奈良国立文化財研究所、佐川正敏1993「第V章考察1屋瓦」『平城宮発掘調査報告XⅣ』奈良国立文化財研究所
- 注4 福山敏男1943「大和法華寺」『日本建築史の研究』桑名文星堂
- 注5 平城瓦編年について、基本的に前掲注3の毛利光・花谷論文に依拠する(表1)。
- 注6 筆者は恭仁宮跡において出土する軒瓦のうち、平城京と同範でないものはすべて山城国分寺に関連するものと考えている。恭仁宮造営に際して軒瓦を生産した瓦工人集団は平城宮造営に関わる集団に由来を求められるためである(溝口泰久2025「恭仁宮造営における瓦生産の展開」『古代文化』第77巻2号)。
- 注7 前掲注6 溝口論文
- 注8 奈良文化財研究所2015「平城京左京二条二坊十一坪の調査-第533次」『奈良文化財研究所紀要』
- 注9 奈良市埋蔵文化財調査センター2019「平城京跡(左京二条三坊一・八坪)の調査 第704次」『奈良市埋蔵文化財調査年報』平成28(2016)年度 奈良市教育委員会
- 注10 奈良市埋蔵文化財調査センター「左京二条五坊北郊の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和59年 奈良市教育委員会
- 注11 法隆寺昭和資料帳編集委員会1992『法隆寺の至宝』第15巻 小学館
- 注12 前掲注6 溝口論文
- 注13 中谷雅治1987「遷原離宮の位置について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注14 法花寺野で採集されたという6285Bと思しき軒丸瓦があるが、詳細は不明である(田中重久1978『奈良朝以前寺院址の研究』白川書院)。